

令和 2 年 9 月 18 日現在

機関番号：22501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K20825

研究課題名（和文）サービス付き高齢者向け住宅における看取りの質評価指標の開発

研究課題名（英文）Development of quality evaluation index for End-of-life care in Elderly Housing with Care Services

研究代表者

杉本 健太郎 (Sugimoto, Kentaro)

千葉県立保健医療大学・健康科学部・講師

研究者番号：80724939

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：まず、国内外の高齢者施設・住宅における看取りの質評価の視点をレビューし、その知見を踏まえ、医療職のいないサービス付き高齢者向け住宅（以下、サ高住）介護職員が捉える看取りの質確保（入居者・家族の満足）に寄与する要因に関するインタビューを行った。分析の結果、設備・体制面では、【看取りに対するコンセプトが職員間で共有されている】、【看取りに関する職員の教育・指導体制がある】、ケア・関わり面では、【入居者が自宅のように最期まで暮らせるように配慮する】や、【地域の関係事業所（訪問看護師等）と円滑に連携する】などが抽出された。これらは、サ高住の看取りの質を評価する指標を構成する要素になり得ると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、高齢者が住み慣れた地域で最期まで過ごすための住まいとして、サービス付き高齢者向け住宅（以下、サ高住）が創設された。しかし、既存の高齢者施設（特養など）と異なり、サ高住内で看取りを行うに際してその質を評価する指標はなく、看取りの質には住宅間で差があると考えられた。本研究が見出した看取りの質確保に寄与する取り組みは、サ高住における看取りの質を評価する指標の構成要素になり得るとともに、住宅内で看取りを実施するサ高住の看取りに関わる体制づくりや、ケア・関わりを充実させる際の一助になると考えられる。

研究成果の概要（英文）：First, a literature review was conducted to confirm items that evaluate quality of End-of-life (EOL) care at facilities for the elderly in Japan and overseas. Secondly, based on the findings of the review, we interviewed the care workers of 'Elderly Housing with Care Services (EHCS)' to explore factors that can be used to assess the quality of EOL care. Analysis of the interview data showed the following equipment/systems: [Sharing the concept of EOL care among care workers], [Education and guidance system for staff regarding EOL care], and so on. Regarding care/support, the following factors were extracted: [Consideration for residents for home-like living], [Smooth collaboration with community visiting nurses, home doctors, and care managers], and so on. The identified factors can be used to evaluate the quality of EOL care in EHCS. In order to ensure quality EOL care in EHCS, the identified factors should be promoted in such facilities.

研究分野：高齢看護学

キーワード：サービス付き高齢者向け住宅 看取り 質 評価

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

世界でも前例のない高齢社会を迎えている日本では、2010年時点で約120万人だった死亡数は2040年には約160万人になることが予測されており、高齢者の看取り場所の確保が重要な政策課題となっている。この状況の中、政府は国民の約6割が「自宅」で最期を迎えることを希望していることを受け、在宅医療・介護を推進して在宅での看取りを推進している。しかし、少子化・女性の社会進出による家族介護者の確保困難等により、自宅での看取り数を大幅に増加させるのは難しい。そこで現在、自宅に代わる看取り場所として注目されているのが「サービス付き高齢者向け住宅(以下、サ高住)」である。

サ高住とは、2011年に創設された高齢者向けバリアフリー住宅であり、常駐する職員による安否確認や生活相談サービスの提供が義務付けられている。政府は、サ高住を自宅に代わる高齢者の住まいのひとつとして位置づけ、訪問診療・看護等と連携させながら、看取りに対応できるサ高住施設数を増加させようとしている。そのため、サ高住の整備にあたっては補助金や税制面の優遇策も講じており、登録件数は創設から4年間で5,493施設17.7万戸と急速に拡大している。

しかし、サ高住において提供が義務付けられているのは前述のサービスのみであり、看取りを行うに際して標準化された方法論やその評価指標などはなく、看取りの質には施設間で差があると考えられる。これは、医療・介護保険上の看取り加算基準が設けられている他の施設(老人保健施設や特別養護老人ホーム等)とは大きく異なる点である。サ高住を看取りの場所として推進するためには、各施設での看取りの質を確保することが必要であり、そのためにはサ高住における質の高い看取りが含む要素を明らかにし、サ高住における看取りの質を評価する際の指標を開発する必要がある。

研究代表者は、複数の都道府県におけるサ高住施設内看取り実態と施設・入居者特性を把握する量的研究(アンケート)を実施した(Sugimoto et al., 2017)。当該研究では、サ高住施設内での看取りを可能にする要因(例:夜間・休日も訪問診療・看護と連携等)を明らかにすることはできたものの、この知見から、質の高い看取りを検討することは難しく、他にもサ高住における看取りに関して研究は蓄積されていない状況である。サ高住以外の高齢者施設については、介護老人保健施設、nursing home、residential care facilities、assisted living facilitiesを対象として看取りの質の評価に取り組んだ報告があるが、これら的高齢者施設で配置が義務付けられている医療職種や、入居者の特性(認知症患者が主であるかどうか等)がサ高住のそれとは異なっており、これらの知見をサ高住での看取りにそのまま適用することは難しい。

2. 研究の目的

以上のことから本研究は、今後増加する死亡を受け入れる役割が求められるサ高住施設内での看取りの質確保に貢献するため、以下を目的とした調査を行う。

- 1) 国内外の高齢者施設・住宅における看取りの質評価の視点を概観すること
- 2) 1)の知見をもとに、サ高住における施設内看取りの質確保に寄与した要因を施設職員への質的調査(インタビュー)により明らかにすること

上記の取り組みにより、サ高住における看取りの質を評価するための指標を構成し得る要素を見出す。

本研究で得られる知見は、多死社会を迎えるわが国における看取り場所の確保という重要な政策課題を解決するために必要な情報を提供することができると考えられる。

3. 研究の方法

- 1) 高齢者施設・住宅における看取りの質評価の視点的概観(文献レビュー)

(1) 文献包含基準

- a. 高齢者施設・住宅内における看取りの質評価の視点を報告しているもの
- b. 英語もしくは日本語で報告されているもの

(2) 文献データベース

- a. 国内文献: 医学中央雑誌(1984-2016)
- b. 国外文献: MEDLINE(1950-2016), CINAHL(1937-2016), Web of Science(1900-2016)

(3) データ抽出

Donabedianの提唱する、医療の質評価の枠組みであるストラクチャー、プロセス、アウトカムを参考にし、先行研究の報告した看取りの質の評価の視点をその枠組みに沿って抽出した。

(4) 検索語

- a. 国内文献
(居住系施設 OR 介護保険施設 OR 老人福祉施設 OR 老人ホーム OR グループホーム) AND 看取り AND 質
- b. 国外文献
(‘residential facilities’ OR ‘supporting housing’ OR ‘assisted living facility’ OR ‘group home’ OR ‘halfway house’ OR ‘home for the aged’ OR ‘nursing home’ OR ‘group living’ OR ‘service house’) AND (“end of life care” or “terminal care”) AND quality

2) サ高住における施設内看取りの質確保に寄与した要因

サ高住介護職員計6名(3施設)の協力を得ることができた。協力者の介護業務経験年数は平均8.2年、サ高住勤務年数は平均3.9年だった。

インタビューデータ分析の結果、入居者・家族の看取りへの満足に寄与すると捉えられていた要因として、設備・体制面では、【看取り時に家族が滞在できる居室やスペースがある】、【看取りに対するコンセプトが職員間で共有されている】こと、【看取りに関する職員の教育・指導体制がある】などが抽出された。教育内容には、臨終時の身体的兆候などが含まれていたが、そうした知識の提供だけでなく、職員が不安なことをすぐ相談できるなど、不安を感じる職員のサポート体制もあげられた。介護職員が感じる不安として、具体的には、医療職との連携などが語られたため、そうした不安を軽減できるような体制づくりが求められる。

また、ケア・関わり面では、【入居者が自宅のように最期まで暮らせるように配慮する】ことが語られた。サ高住は、そもそも、高齢者の自宅に代わる住まいとして位置づけられていることから、本カテゴリーはサ高住内での看取りにおいて、基本的かつ重要なものであると考えられる。

また、【日常的にコミュニケーションをとることで入居者・職員間の信頼関係を構築する】ことが、質の高い看取りにつながっていると捉えられていた。サ高住入居者は既存の高齢者施設と比べると、入居者の自立度が高く、職員がケア等で接する機会は限定的である場合がある。そのような場合でも、廊下ですれ違う際に声かけを行うなど、効率的にコミュニケーションをとり、信頼関係を構築する必要があると考えられる。

【地域の関係事業所と円滑に連携する】も抽出された。医療職のいないサ高住で看取りを行うためには、地域の診療所や訪問看護事業所との連携が必要不可欠である。そのために、サ高住の介護職員には、入居者や家族の終末期の希望を連携する医療職に代弁し十分に情報共有すること等の取り組みが求められることが示唆された。

今回の研究で抽出された看取りの質確保(入居者・家族の看取りへの満足)に寄与する取り組みは、サ高住内での看取りの質を評価する指標を構成する要素になり得るとともに、住宅内で看取りを実施するサ高住の看取りに関わる体制づくりや、ケア・関わりを充実させる際の一助になると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Sugimoto Kentaro, Ogata Yasuko, Kashiwagi Masayo, Ueno Haruka, Yumoto Yoshie, Yonekura Yuki	4. 巻 16
2. 論文標題 Factors associated with deaths in 'Elderly Housing with Care Services' in Japan: a cross-sectional study	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 BMC Palliative Care	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s12904-017-0241-9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 杉本健太郎, 柏木聖代
2. 発表標題 サービス付き高齢者向け住宅の介護職員が捉える施設内看取りに対する入居者・家族の満足に寄与する要因
3. 学会等名 日本在宅看護学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----